

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅸ

－後期中葉期 加曽利B式土器文化期の様相 その2－

－主要遺跡の一括出土事例－

縄文時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

本プロジェクトでは昨年度から後期中葉期・加曽利B式土器文化期の様相をめぐる研究を開始した。昨年度は報告書を中心とした文献から加曽利B式期の遺跡に関する情報を抽出し、抽出したデータから当該期の集落遺跡を中心とした主要遺跡のデータベース作成を行い、研究略史、神奈川県内における加曽利B式期の遺構が発見された主要遺跡の地名表、参考文献を『研究紀要27』に掲載した。今年度は次年度以降編年案を構築するため、短期間に形成されたと考えられる一括出土事例の検討を行った。本号では一括出土事例の中から良好な一括出土事例20例を選んで掲載した。なお挿図の縮尺は住居跡が1/120、土器が1/10を基本にしている。本文中の遺構名は報告書に準拠した。土器の脇にある括弧内の番号は報告書の図番号を示す。土器の記述は一般的に用いられている用語を使用することとする。(岡)

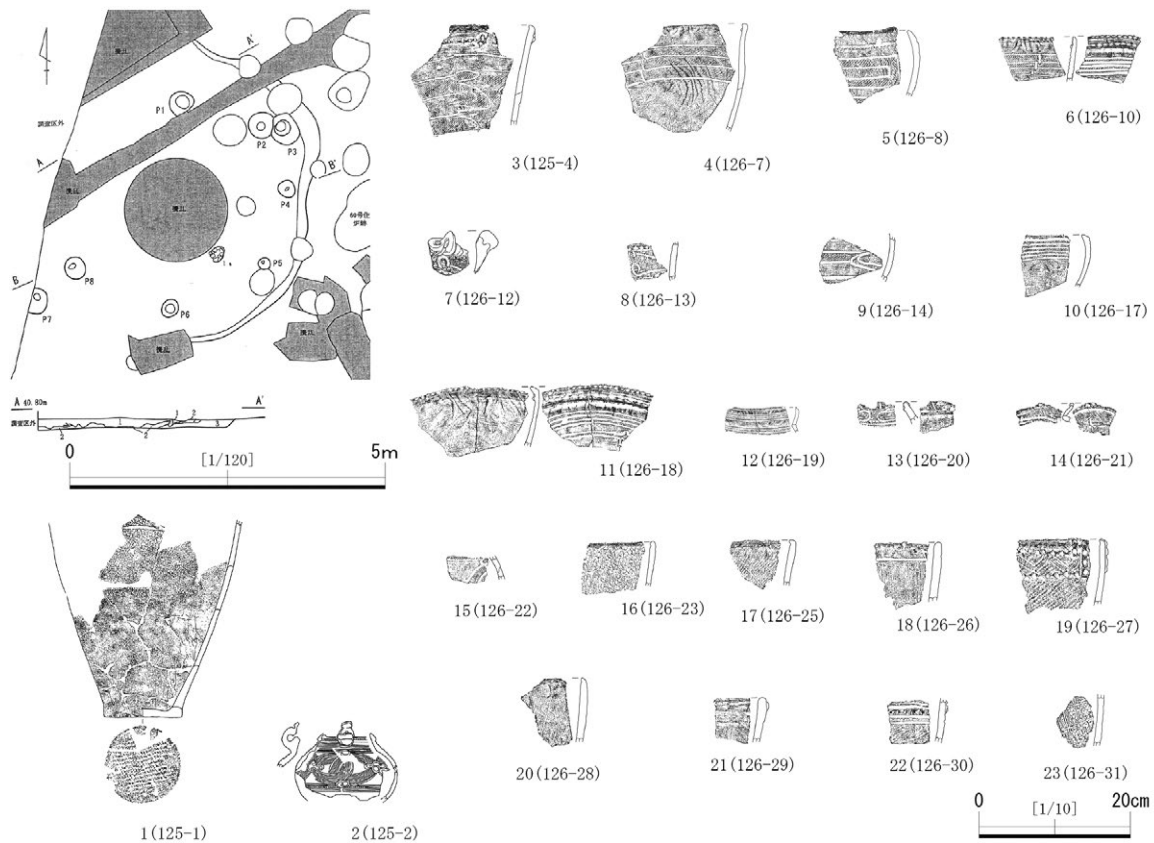
2. 一括出土事例

〈事例1〉篠原大原北遺跡 58号住居跡（第1図）

篠原大原北遺跡は横浜市港北区篠原町73-2外に所在し、鶴見川右岸の標高約40mの台地上に位置する。中期中葉～後期中葉にかけての集落跡で60軒の住居跡が確認されている。

58号住居跡の西側は調査区外に延び、中央部及び北東側は攪乱によって壊されており、住居跡の全体構造は判然としない。また60号住居跡と重複する。平面形は不整形円形を呈するものと思われる。北側から南東側にかけて壁が検出され、この壁に沿って5基のピットが配されている。炉跡は中央部の攪乱によって失われたと考えられる。住居主軸は不明である。出土遺物は土器1,344点、土製品1点、石器類20点、石製品2点、礫9点で、住居跡は加曽利B1式と報告されている。

1、3、4～9は精製深鉢形土器である。3は堀之内2式の深鉢であるが、横帯文内に弧状の縦位短沈線が施される。1、4～6、9は横帯文が施される。4、6には横帯文内に縦位短沈線が施される。5は口唇部直下の沈線の下位に沿って斜細沈線が施され、横帯文はコの字状となる。6は内面にも横帯文と斜細沈線が施される。9は縦位の弧状の縄文帯が垂下する。7は波状口縁で波頂部に円形の貼り付け文が配され、直下に沈線による円形のモチーフが描かれる。8は平行沈線間に刺突が施され、以下に（）字状のモチーフが描かれ、そこから弧状の沈線が横に延びる。10は鉢形土器、11は浅鉢形土器で、12も鉢形土器と思われる。横帯文が施され、横帯内に斜細沈線が認められるが、11には内面に施される。2、13～15は注口土器である。2は細い条線で文様が描かれ、文様の変化点や接点に「の」字文などが認められる。16～23は粗製深鉢形土器で縄文のみのものや、沈線による格子目文、紐線文などが認められる。(粕谷)



第1図 〈事例1〉篠原大原北遺跡 58号住居跡一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

〈事例2～9〉華蔵台遺跡 一括出土事例（第2～7図）

華蔵台遺跡は、横浜市都筑区荏田5丁目に所在し、早淵川と鶴見川に挟まれた丘陵上のほぼ中央に位置する。遺跡は、早淵川・鶴見川両河川の分水嶺に相当する丘陵の主尾根から派生した複雑な形状の尾根の先端付近に位置し、遺跡の標高は43～48mを測る。同じ尾根上には、荏田1遺跡・荏田2遺跡・華蔵台南遺跡など後期の集落遺跡が密集する。尾根を取り囲む支谷は早淵川に繋がり、華蔵台遺跡を含め早淵川水系に属することとなる。集落遺跡としては堀之内1式から晩期安行式まで営まれ、加曽利B式を主体とする後期中葉の遺構としては3～6号住居址、16～18号住居址、19・32号住居址が相当する。竪穴住居址数は少なくないが遺構の重複が著しく、検出面からの掘り込みが浅いなど、竪穴住居覆土として捉えられる部分が限定され良好な一括事例として取り上げられる資料は必ずしも多くは無い。ここでは3・4・6号住居址、16号住居址、29号住居址・32号住居址を取り上げる。また後期前葉から晩期に至る土壌墓群が形成されており、このうち5～7号土壌、34号土壌を一括事例の資料とした。

〈事例2〉華蔵台遺跡 3号住居址（第2図上段1～8）

3号住居址は方形を呈する。柄部の存在は明瞭ではない。環状を呈する集落遺跡の中央付近、土壌墓群に接するように位置する。攪乱により遺存状態は必ずしも良くない。残存した壁と炉・柱穴列により住居跡と認識された。柱穴列により新旧の2段階があったものと想定された。住居覆土もほとんど遺存しておらず、出土遺物は水平位置からの復元であり、覆土としても上層相当からの出土と想定される。

1は斜線文を施す深鉢である。くびれ部を有し、ここを無文とする。斜線文は矢羽根状とならない。2は

浅鉢で、やはり斜線文を施すが、部分的に矢羽根状となる。3は口縁部に縄文、頸部に列点、以下に斜線を施す。5は口縁部直下に列点、以下に斜線文を施す深鉢である。斜線文は矢羽状の構成をとる。6は格子目状に沈線を施した深鉢、7は無文の深鉢である。8は条線を施した粗製深鉢である。

〈事例3〉華蔵台遺跡 4号住居址（第2図中段1～9）

4号住居址は方形を呈する。柄部は明瞭ではないが、住居東側の柱穴列が出入り口に関連する可能性を指摘されている。3号住居址に近接するが切り合い関係は無い。3号住居址同様に攪乱がひどく、壁・床・覆土の遺存状態は良くない。柱穴は多数検出されているが、本址に帰属していないものも含まれる。3号住居址同様に、柱穴列により新旧の2段階があったものと想定された。出土遺物はわずかに残された覆土中のものと水平位置からの復元によっている。

1は口径16cmほどの深鉢である。口縁部を無文とし、直下に列点、その下に矢羽根状の沈線を多段に配する。3・5は格子目状に沈線を施した深鉢、6は浅鉢の底部である。8は櫛歯状の工具による条線を縦位に施している。7は沈線の横位区画内に縄文を施すものだが、本住居出土の他の土器と比較すると格段に古く、住居の営為時期を大きく遡るものと考えられる。出土土器は前述の3号住居址よりやや古く位置付けられる。

〈事例4〉華蔵台遺跡 6号住居址（第2図下段1～6）

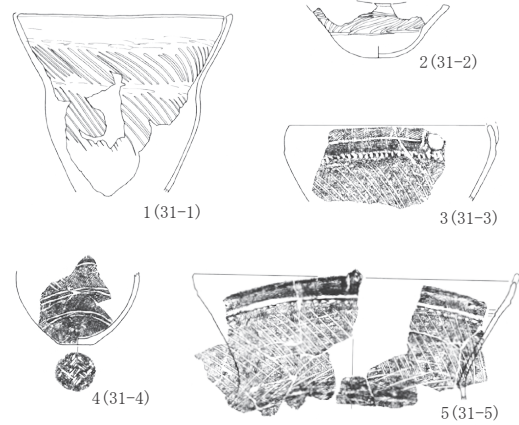
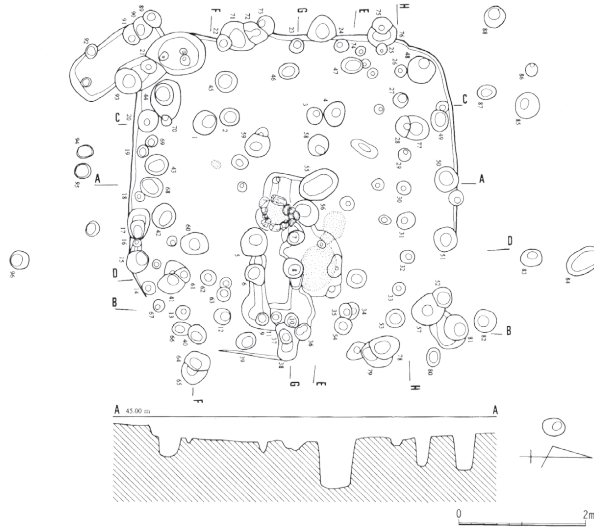
6号住居址は方形を呈する小型の住居址である。炉から並行して伸びる柱穴列が住居出入り口に関連する施設とみられるが、柄部の存在は明瞭ではない。環状を呈する集落遺跡の北側に位置する。前述の3・4号住居址同様に、攪乱により遺存状態は必ずしも良くない。わずかに残された覆土中から遺物の出土があるが多くの無い。

1は口縁部直下が「く」の字に屈曲する浅鉢とみられる。屈曲部から下にはやや間を開けた斜線文が施される。2・3は小さな破片であるが、無文の鉢形土器とみられる。4は口縁部直下に2段の列点を施した土器である。5は頸部に刺突文を巡らせ、以下に条線を施している。6は頸部がくびれた深鉢とみられ、くびれ部に巡らせた2本の沈線間に刺突を連続させている。

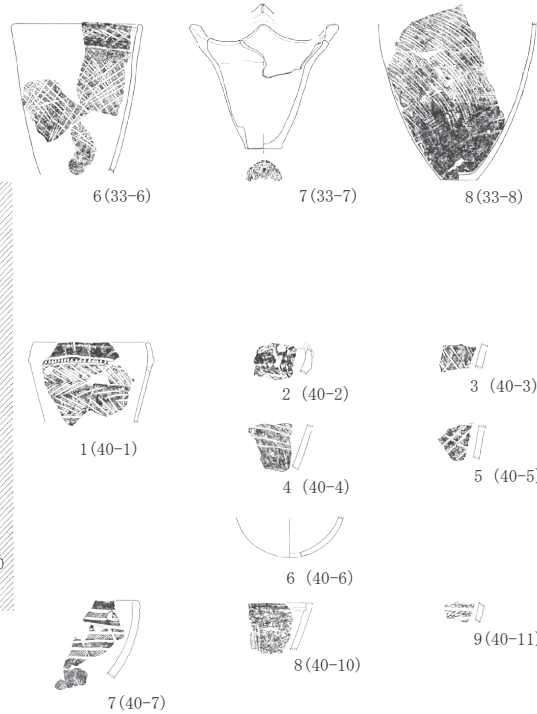
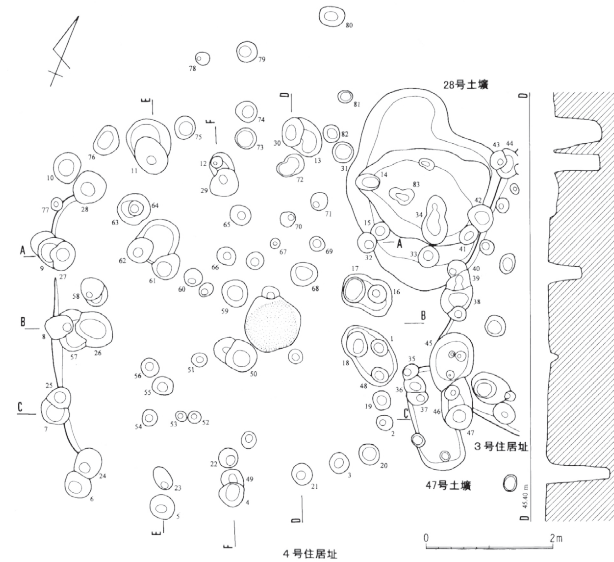
〈事例5〉華蔵台遺跡 16号住居址（第3図 第4図1～28）

10回ほどの建替え・重複が繰り返された多重住居址である。住居址が位置するのが、集落の所在する台平坦面の基部にあたる南西方向に向けて斜面が高くなる箇所に対応し、集落遺跡内で最も標高の高い位置にある。本住居址は、最大時径8～10mほどになる大型の住居跡で、集落内における位置と繰り返された建て替えや規模により、集落内の所謂「核家屋」に比定される。住居址の平面形は、やや胴張になった隅丸方形ないしは円形を呈する。図の下方（北東方向）に向け激しく重複した「ひげ状」あるいは「ハの字状」の柱穴列が認められ、住居出入り口に関連する施設とみられる。10回前後の建替えのうち、柱穴列の並びから16a～e号の5軒の住居址が析出された。このうち図の下方、標高の最も低い位置にある16e号住居跡が最も古く、斜面上方側の最も標高が高い位置に構築された16a号住居址が最も新しい。このうち最終段階の16a号住居址は加曽利B1式に比定されるが、最も古い16e号住居址については、その形態から堀之内2式期に遡る可能性が指摘されている。住居址覆土の遺存状況は良好で、斜面上方側で1m近い深さを有する。出土土器のうち1と6は、第4図に別途示したように住居址のピットからの出土である。報告者はピットへの「埋納」としている。1は並行沈線を階段状の区切り文で連絡し単節LR縄文を充填する。2は沈線文帯を2帯に配した壺形土器である。並行沈線文は4か所で斜位に連絡される。縄文の充填はあるが、沈線間の

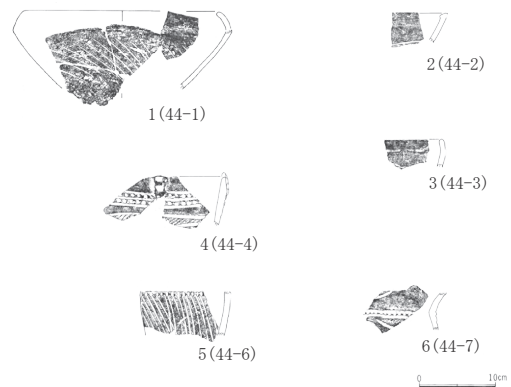
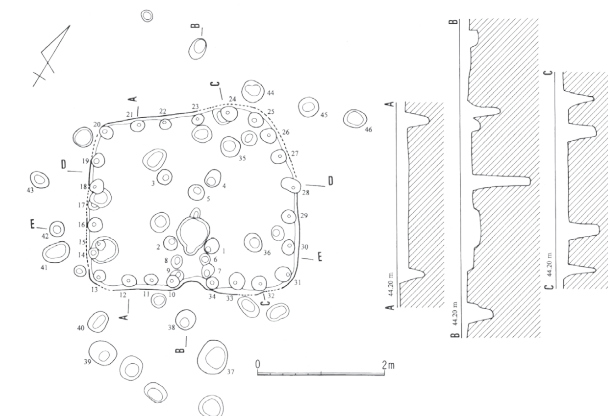
〈事例2〉 華蔵台遺跡 3号住居址



〈事例3〉 華蔵台遺跡 4号住居址



〈事例4〉 華蔵台遺跡 6号住居址



第2図 〈事例2～4〉 華蔵台遺跡 一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

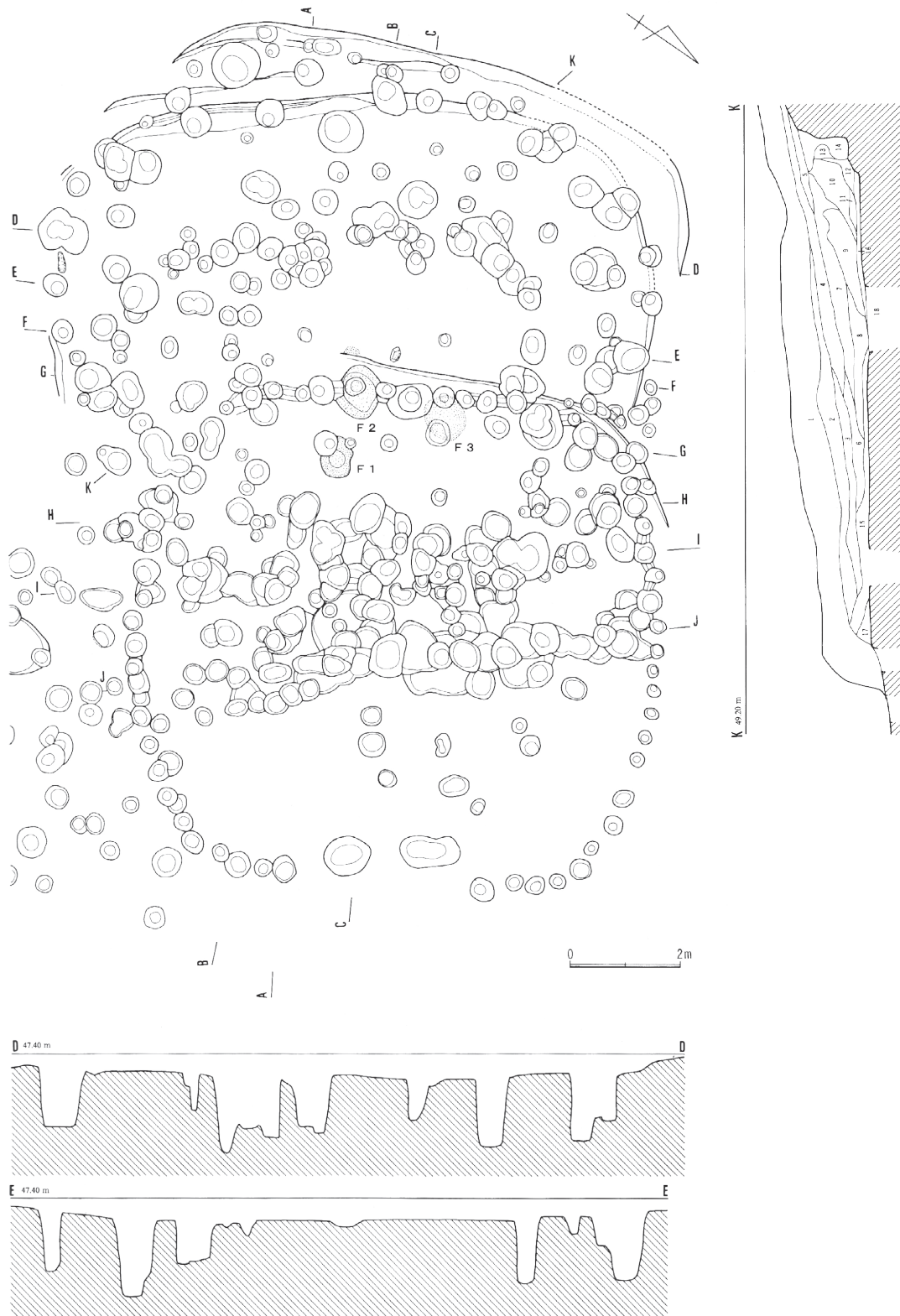
間隔が狭くはっきりしない。5は奥壁部の床面に、2は16a号住居中央付近の床面にそれぞれ置かれた状態で出土している。3・5・6・8～10は小型の鉢形土器である。7は前述した土器とは胎土が異なり、砂粒の混入が多く器面調整もやや劣る。口縁部を欠損するが注口土器と考えられ、この土器だけが堀之内2式で、住居に属する土器としては形式的に古い。また3・9・13～16は住居址覆土下層、4・8・10・11・17・25は覆土上層の出土である。12の鉢形土器については、覆土下層と上層の両方から出土している。16も床面と覆土下層の両方から出土している。16は口縁部を欠いているが、無文化、小型化した鉢形土器と思われる。13は3単位の波状口縁となる縄文施文の深鉢、14は口縁部がやや内傾する同じく縄文施文の深鉢である。覆土上層の出土とした25のくびれを有する深鉢は加曽利B2式で、前述した土器よりも新しい。25を含む21～28に加曽利B2式を示す。これらはいずれも覆土上層の出土である。25と26～27はいずれも粗製の深鉢で、26は格子目文を施したもの、27は多数の沈線を縦位に垂下させたもの、28は櫛歯状工具による条線をやはり縦位に施している。

〈事例6〉華蔵台遺跡 29号住居址（第5図1～27 第6図29～40）

29号住居址は方形を呈する小型の住居址である。図下方に位置する溝で連結された対の柱穴とこれに付帯する柱穴が、住居出入り口に関連する施設とみられるが、柄部の存在は明瞭ではない。環状を呈する集落遺跡の南側に位置し、集落の所在する平坦面南側の斜面に臨む。25・26号住居址と重複し、住居址の特徴から27号住居址よりも新しいと考えられるが、25号住居址との前後関係は判然としない。比較的良好な覆土が残され、出土遺物も多い。遺物は炉址から入り口部分にかけて床面から若干浮かんだ状態で、土器がややまとまって出土した。また覆土中とこれに相当する包含層中からも多数の土器が出土している。床面からの遺物出土は認められなかった。出土遺物は堀之内式から加曽利B式・曾谷式まで出土している。これらのうち堀之内式は本住居址に係らないものとして、この掲載にあたっては割愛している。

1は平口縁の深鉢。2～5は3単位の波状口縁の深鉢であるが、突起部分の遺存状態は悪い。ともに斜行沈線を施しており、2・4・5では矢羽根状とする。6は口縁部直下に格子面文を施す深鉢である。口縁部に棒状の粘土を連続して貼り付け、極小の突起部を連続させた口縁としている。7もゆるやかな波状口縁となる深鉢である。口縁部に無節Lの縄文を施し、矢羽根状の沈線を配する。8と9は頸部に沈線で区画した無文帯を配し、器面全体に条線を施す深鉢である。10は胴部が算盤玉型を呈する深鉢で、肩部の沈線区画内に口縁部に無節Lの縄文、胴下半部に矢羽根状の沈線を施す。11は頸部の無文帯を挟み、上下に矢羽根状の沈線を配した深鉢で、口縁部には2条の沈線が巡り、その間に単節LR縄文を施す。12も同様に頸部の無文帯を挟み、上下に矢羽根状の沈線を配した深鉢であるが、無文帯の幅が広く、良く研磨されている。13も矢羽根状沈線が施される頸部が括れた深鉢であるが、半粗製の印象の土器である。口縁部を段状に突出させ、押捺を施している。14は図ではわかりにくいですが、矢羽根状の沈線を細かく施した深鉢である。15は径が40cmを超える大型の深鉢で、5単位の波状口縁になるものと推定された。波頂部には円形の貼付文、波底部に半月状の貼付文を付ける。口縁部には2条の沈線を添わせ、無節Lの縄文を施す。頸部には蛇行する沈線が垂下され、胴部には間隔をあけた条線が施される。16も半粗製の深鉢である。肥厚した口唇部を内削ぎにして、ここに幅広の押捺を施している。器表面には2条の並行する沈線を縦位・斜位に垂下させる。17は縄文地文に格子目文を施した深鉢である。頸部に無文帯を配する。18は上半部のみのものであるが脚付きの鉢と推定される。口縁部には刻みが施され、6単位の緩やかな波状を呈する。括れ部の無文帯を挟み刻みと条線が施される。19は屈曲部下に縄文を地文とした条線の施された深鉢。20は口が窄まっ

〈事例5〉華藏台遺跡 16号住居址



第3図 〈事例5〉華藏台遺跡 16号住居址一括出土事例（1）（遺構1/120）



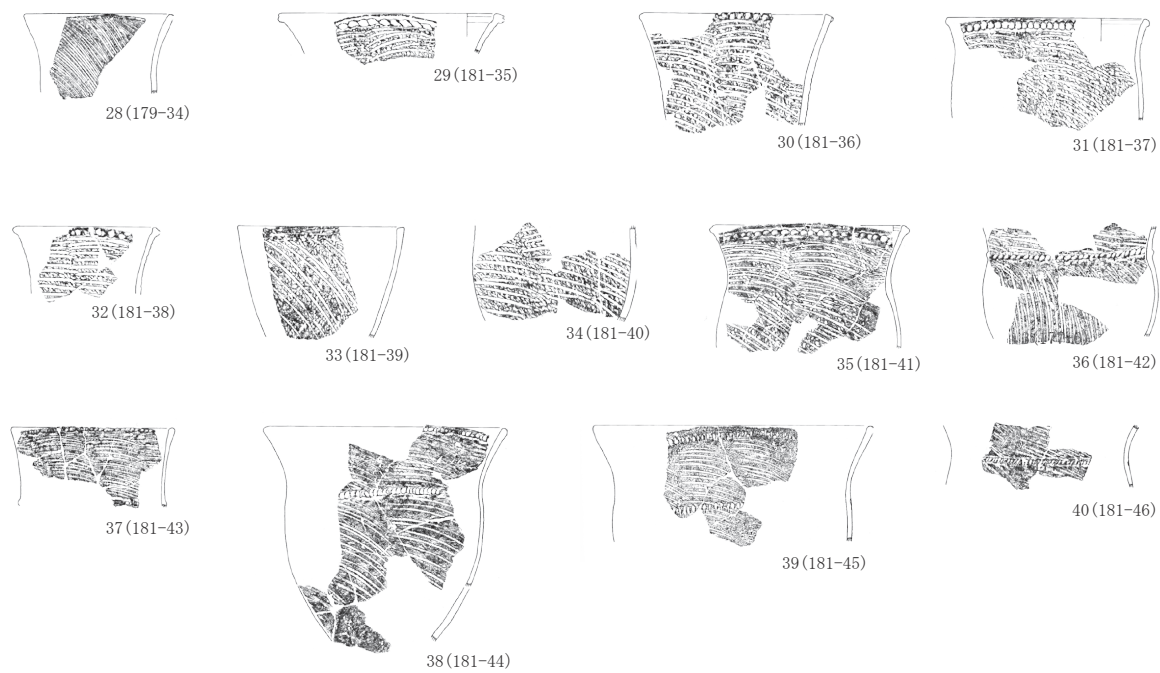
第4図 〈事例5〉華蔵台遺跡 16号住居址一括出土事例(2)(遺構1/60・遺物1/10)

〈事例6〉 華藏台遺跡 29号住居址

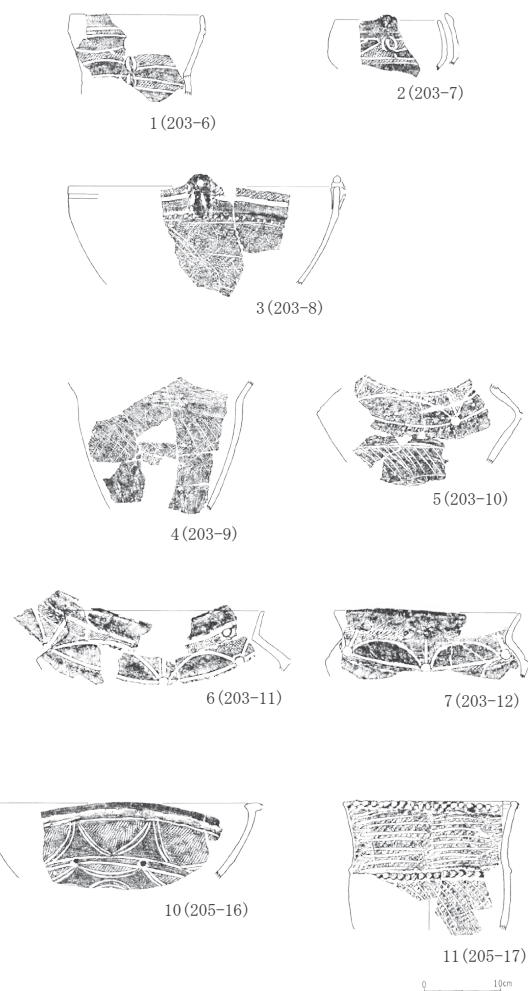


第5図 〈事例6〉 華藏台遺跡 29号住居址一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅸ



〈事例7〉 華藏台遺跡 32号住居址



第6図 〈事例6・7〉 華藏台遺跡 29号住居址・32号住居址一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

た深鉢。口縁部の並行する沈線間に刻みを施し、頸部に配したレンズ状の区画内に単節LR縄文を施す。21は波状口縁の深鉢。口縁部に2条の沈線を添わせ、沈線による区画内に単節LR縄文を施す。22は口唇部に刻みが施され、また瘤状の突起が貼付される。これらの直下に3条の沈線を巡らし弧状の沈線と合わせて形成した区画内に単節LR縄文を施す。23も20～23同様に、沈線による区画内に縄文を充填する深鉢の胴下半である。24～27は浅鉢である。24は口縁部が小さな波状の連続となる。器の内外綿の口唇部直下に並行沈線間に円形の刺突を加えた文様を配する。26は口縁部が波状を呈する丸底の浅鉢である。27は口縁部に縄文を施し、無文帯を挟んだ屈曲部に刻み、直下に矢羽根状の沈線を配する。28以下は粗製土器となる。28は条線のみが施され、縄文の地文が無い。29～36は口唇部あるいは頸部に紐線文を配し、地文の縄文上に条線を施すものである。29～35は条線が太い。36以下は紐線が細く、条線も浅い傾向にある。37～40も同様の粗製土器であるが、地文の縄文を欠き、器壁が極端に薄い。

〈事例7〉華蔵台遺跡 32号住居址（第6図1～11）

32号住居址は胴張り隅丸の方形を呈すると想定される小型の住居址である。29号住居址同様に、環状を呈する集落遺跡の南側に位置し、集落の所在する平坦面南側の斜面に臨み、住居の東側と南側は斜面にかかり、床面・壁面を消失している。また31号住居址（堀之内2式）と切り合い関係にあり、帰属するピットが判然としない。住居出入り口に関連する施設や柄部ははっきりしないが、図の炉下方の柱穴群が出入り口施設に関連する可能性はある。遺物は堀之内2式～加曽利B式が出土している。

出土土器のうち、堀之内2式や破片類の大半は割愛している。図示した土器のうち1・2・7が覆土下層、4・9・11が覆土上層の出土で、他は覆土出土として取り上げられている。出土土器のうち1と2は加曽利B2式で全体の中ではやや古い。横位の沈線による区画内にLR縄文を充填する。3以下は加曽利B3式となる。3は大型の浅鉢で、口唇部に縄文を施し、胴部には浅い沈線で文様を描出する。4は屈曲部に無文帯を置き、上下に格子目状の沈線を配する深鉢である。5～7は所謂「算盤玉」形の鉢。横位の沈線と同じく横位の弧状沈線で区画を形成し縄文を充填する。基本的に頸部の屈曲箇所に沈線は施されないが、6のみは頸部を研磨することにより沈線に近い効果を発揮し、一部は浅い沈線状になる。胴部の屈曲部には5と6には刻みが、7では縄文が施される。8は無文の深鉢である。9は口縁部に瘤状の縦位貼付文を施す深鉢。横位の沈線と弧状沈線により区画を形成し縄文を充填させる。10は報告書の記述は無いが、浅鉢と考えられる。並行する弧状の沈線を対置させ横位の沈線と組み合わせることで形成した区画内に縄文を充填している。11は紐線文の深鉢。縄文地文上に、頸部には横位、胴部には斜位の条線を施す。

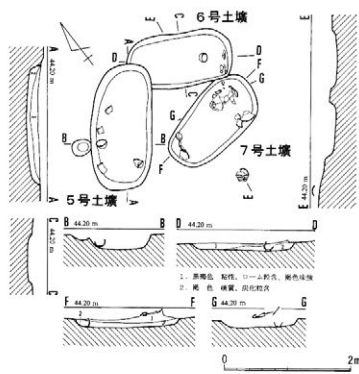
〈事例8〉華蔵台遺跡 5・6・7号土坑（第7図上段1～16）

華蔵台遺跡では環状を呈する集落遺跡の中央広場に加曽利B式期を中心とした土壌墓群が形成されている。これらは南北2群に分かれ、ともに小型土器の埋納を伴う事例が多い。全体的な傾向として、南群に加曽利B1式の土器が伴い、北群に加曽利B式後半の土器が伴う傾向が指摘されている。これら土壌墓群のうちで複数個の埋納が認められる事例を取り上げる。

5・6・7号土坑は前述した2群の北側グループに属し、その最も北寄りに位置する。5号は6号と6号は7号とそれぞれ切り合い関係にあるが、新旧関係についての記載は無い。

1～6は5号土坑出土、7・8は6号土坑出土、10～16は7号土坑の出土土器である。また9は6・7号土坑の双方から出土している。このうち5号土坑出土の3と7号土坑出土の14・15・16は覆土上層からの出土である。これらは晩期の安行式で、他の土器の時期と全くことなるが、ともに古い土壌墓への儀礼行為

〈事例8〉 華蔵台遺跡 5・6・7号土坑



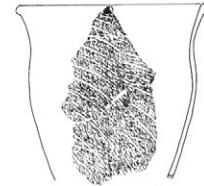
1 (339-5号坑1)



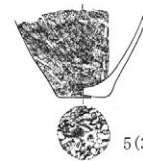
2 (339-5号坑2)



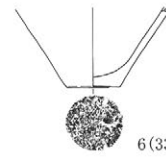
3 (339-6号坑3)



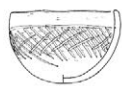
4 (339-5号坑4)



5 (339-5号坑5)



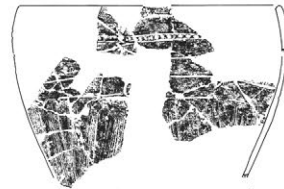
6 (339-5号坑6)



7 (339-6号坑1)



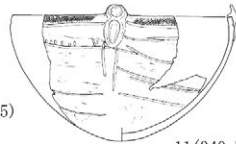
8 (339-6号坑2)



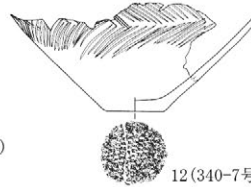
9 (339-6・7号坑3)



10 (340-7号坑5)



11 (340-7号坑2)



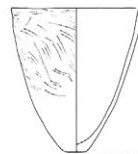
12 (340-7号坑3)



13 (340-7号坑4)



14 (340-7号坑5)

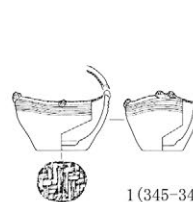
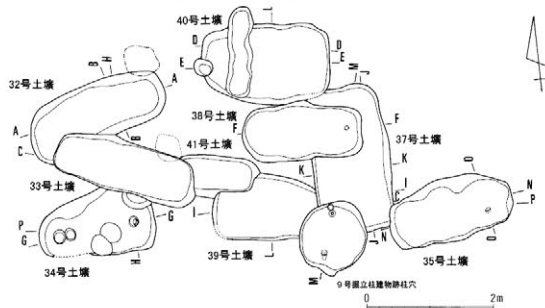


15 (340-7号坑6)

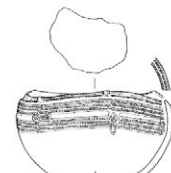


16 (340-7号坑7)

〈事例9〉 華蔵台遺跡 34号土坑



1 (345-34号坑1)



2 (345-34号坑2)

第7図 〈事例8・9〉 華蔵台遺跡 一括出土事例 (遺構1/120・遺物1/10)

の可能性も考慮に入れここに記載する。5号土坑出土の1は斜位の条線を矢羽根状に配する深鉢。同じく2は頸部に無文帯を配して上下に斜位の条線を施す。4は地文縄文の上に斜位の条線を施した粗製土器である。6号土坑出土の7・8はともに小型の浅鉢である。7は格子目文、8には沈線による区画内に縄文が充填される。7号土坑出土の10は無文帯の上下に条線を施した浅鉢。11も浅鉢で口唇部に縄文を施し、胴部には浅い沈線で文様を描出する。12は矢羽根状の条線を配した土器の胴部下半部、13は地文縄文に条線を施した粗製土器である。

〈事例9〉華蔵台遺跡 34号土坑（第7図下段1・2）

華蔵台遺跡の加曽利B式期を中心とした土壌墓群の分布状況については、多重複住居址である16号住居址との関連性が注意されるところである。同住居址に近い集落遺跡中央広場の南～南西側（あるいは中央広場の南側縁部）に本遺構を含む加曽利B1式の土器を伴う土壌墓群が形成され、上述の5号から7号土坑を含めた加曽利B式後半期の土器を伴う土壌墓群が中央広場のより内側に形成されていることを指摘できる。

34号土坑は前述した2群の南側グループに属し、その南西コーナーに位置する。付近には32～41号土坑が群在し、それぞれ切り合い関係にあり、本遺構も33号土坑と切り合い関係にあるが、その新旧関係についての記載は無い。

1と2は34号土坑出土の小型浅鉢である。1は2単位、2は3単位の波状口縁となる。1の口縁は円形ではなく、波頂部両端側が長くなった楕円形を呈する。同様の小型浅鉢は21・22・24・35号土坑からも出土している。これらは34号土坑同様の南群、前述した中央広場外縁のグループに属する。 (小川)

〈事例10〉原口遺跡 J13号敷石住居址（第8図）

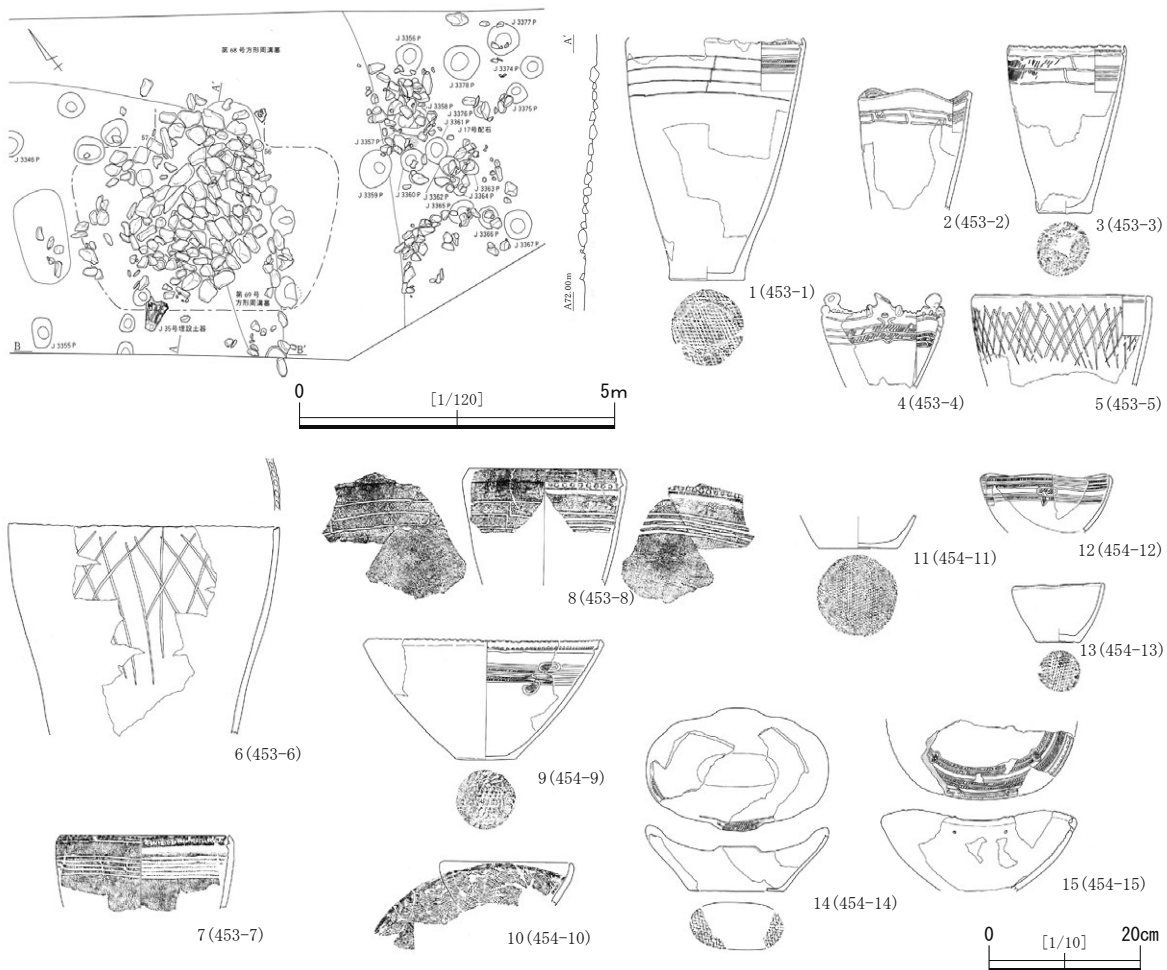
原口遺跡は平塚市上吉沢に所在し、大磯丘陵北東端の標高73～75mの洪積台地上に位置する。平成4年～平成6年に実施された発掘調査により、縄文時代前期末から後期中葉にかけての集落が検出された。

J13号敷石住居址は北側に張り出した舌状台地の中央西寄り、標高約72mに位置する。東側を第68号方形周溝墓によって切られ、敷石の東寄りの覆土上層を第69号方形周溝墓によって切られている。また、本遺構の敷石面より低い位置でJ35号埋設土器が、第68号方形周溝墓を隔てた場所にJ17号配石がそれぞれ発見されているが、本敷石とは別の遺構として把握されている。北東側の調査区境界断面には主体部に相当する明確な掘り込みは認められていない。敷石内には一対の石棒が配置されており、その配置から張出部として把握した。敷石は現状で3m×2.5mの範囲で敷設されており、復元される規模は3m×4.2m程度であると報告されている。本遺構からは中期初頭から後期の土器が1,078点出土しており、復元資料15点、破片資料27点の土器が報告書に掲載されている。1～4・7・8は内外面に縄文帯や集合沈線が巡る精製深鉢。2を除き口唇部内面に廻る突帯上端に刺突列が巡る。1は外面に粗雑な沈線帯、内面に刻みを充填した集合沈線が巡る。2は波状口縁で、内外面に沈線帯が巡る。3は口唇部に細かい刻みが施される。4は波状口縁で口唇部には細かな刻みが伴う。7は外面に施された縄文も内面の集合沈線に充填された刻みも磨消によって薄くなっている。口唇部には細かな刻みが施される。8は7と同様に外面の縄文は浅い施文である。5・6は斜格子文が施文された粗製の深鉢である。5は口唇部内面に沈線が巡り、6は口唇部に刻みが施される。9・12～15は鉢である。9は内面に刻みが充填された集合沈線が巡る。口唇部は細かな刻みが施され、内面直下に刺突列が加えられた突帯が巡る。12は浅い波状の小鉢。13は無文の小鉢。14・15は平面形が楕円形のバスケット形の浅鉢である。10は縄文が施された深鉢もしくは浅鉢。11は注口土器の底部である。本遺構からの出土土器の6割が堀之内式・加曽利B式とこれに伴う無文や縄文施文の土

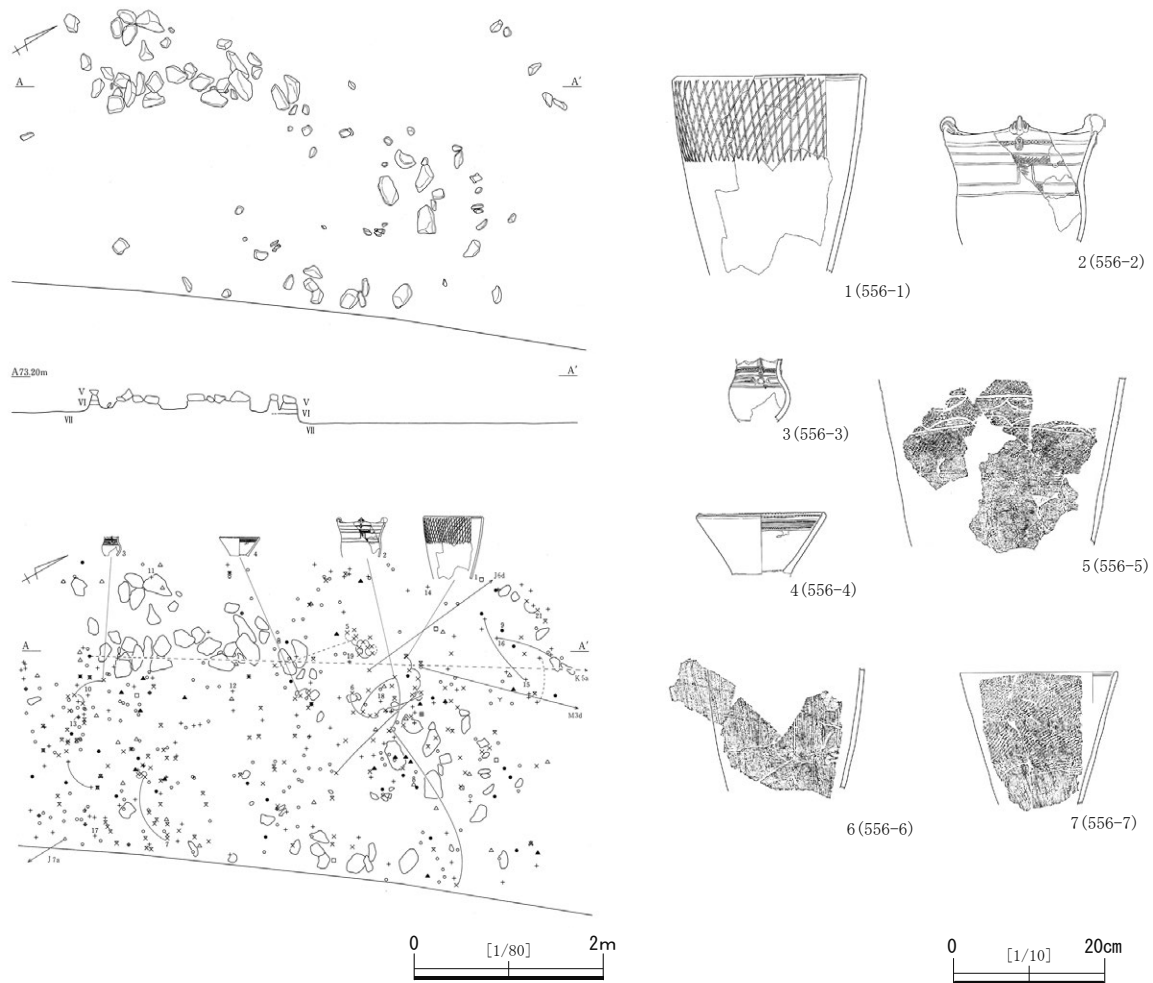
器であること、後期の土器の中でも復元個体や大形破片は加曽利B1式が目立つことなどから、加曽利B1式期に該当するものと考えられる。

〈事例11〉原口遺跡 J20号配石（第9図）

J20号配石は標高73mの北側に張り出した舌状台地の縁辺に位置している。遺構からは大きめの礫が分散して出土しており、南西部に礫の集中した部分がみられる。層位的には基本層序のⅤ層中で検出されている。礫の配置に規則性はないが、礫集中部分には平坦面が構成されると報告されている。報告書には復元資料7点、破片資料14点の土器が掲載されている。1と6は斜格子文の粗製深鉢、2は縄文帯で杵状文が構成される深鉢。深鉢は頸部が括れる形態で、文様モチーフは堀之内2式の杵状文、口縁部形態は加曽利B1式の特徴を持つ。3は沈線で杵状文が描かれる小形壺。小形壺は器形的には加曽利B式だが、胴部文様帯も杵状文を基本とした堀之内2式的なものである。4は内面に刻みを伴う集合沈線が巡る鉢。5は縄文を地文に沈線で横位の対弧文が描かれる粗製深鉢。7は縄文施文の粗製深鉢。1～7は堀之内2式末～加曽利B1式で、本遺構は層位や土器の出土状況から加曽利B1式期と報告されている。（岡）



第8図 〈事例10〉原口遺跡 J13号敷石住居址一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）



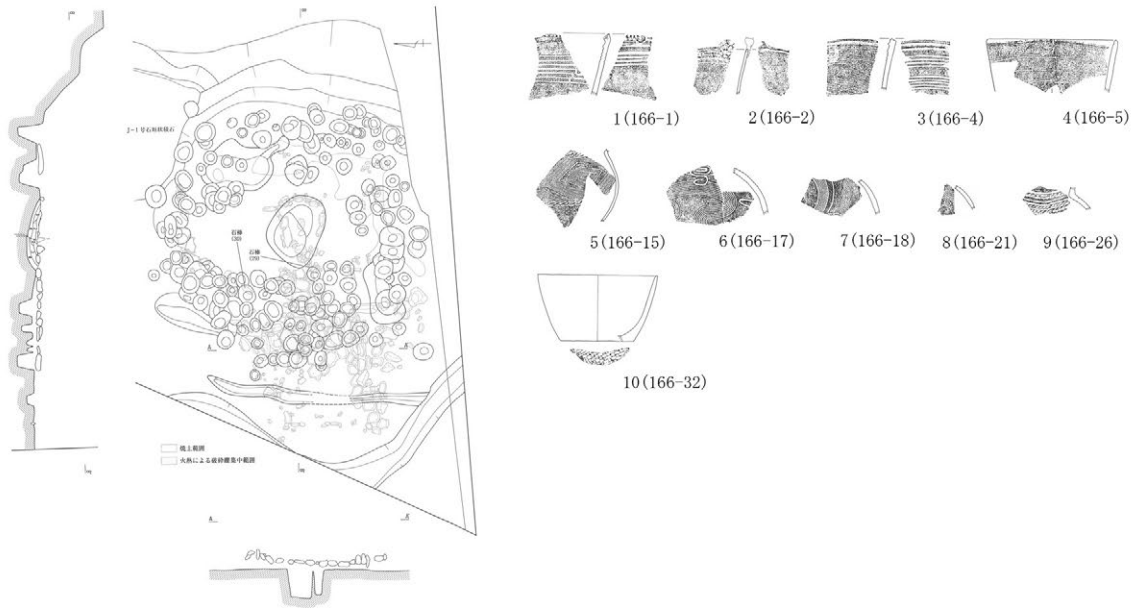
第9図 〈事例11〉原口遺跡 J20号配石一括出土事例（遺構1/80・遺物1/10）

〈事例12〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J－2号柄鏡形（敷石）住居址（第10図上段）

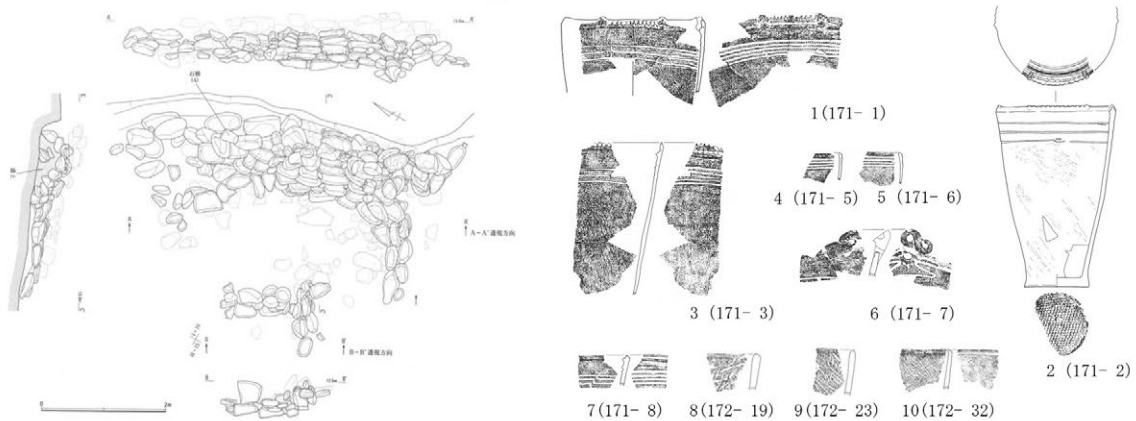
御組長屋遺跡は小田原市南町一丁目地内に所在し、早川東岸の南東に張り出した標高約15～25mの天神山丘陵部縁辺に位置する。堀之内1式期から加曾利B1式期の遺構が検出されている。第Ⅱ地点J－2号柄鏡形（敷石）住居址、J－1号石垣状積石、J－1号配石遺構からまとめて遺物が出土した。これらの遺構は重複関係にあり、新旧関係は、J－2号柄鏡形（敷石）住居址→J－1号石垣状積石・J－1号配石遺構とされ、J－1号配石遺構はJ－2号柄鏡形（敷石）住居址の廃絶後の覆土下層に構築されている。

J－2号柄鏡形（敷石）住居址は丘陵崖部を段切り状に掘削して構築されている。柱穴群は数列の環状配置を取る。炉は新旧2基が確認された。出土遺物は、報告書には土器37点、石器30点が掲載されている。1～4は精製深鉢形土器で、2は堀之内2式に比定される。1の外面には横帯文と縦位短沈線が施文され、口唇部の断面形状は尖頭状を呈する。3の内面には横帯文と斜細沈線による文様が2段みられる。口唇部内面にも細斜沈線が施文される。4は外面に3条の沈線によるやや幅の広い横帯文が巡る。5～9は注口土器の胴部片で、5～8は櫛目状の集合沈線により文様が描かれる。9は幅の狭い沈線間に円形刺突文が密接して施文される。10は無文の鉢形土器で底面には網代痕がみられる。

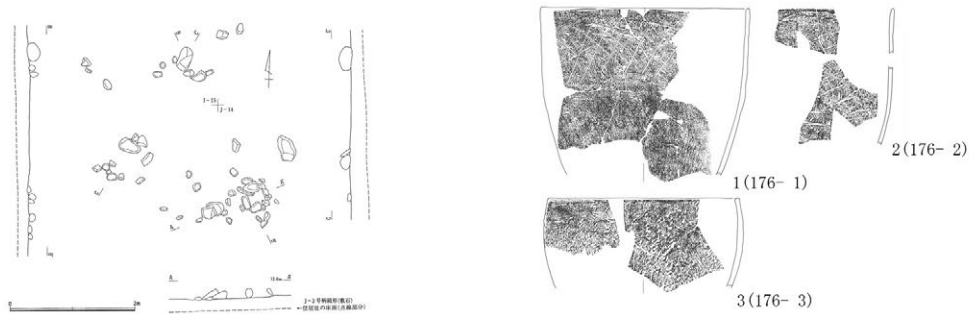
〈事例 12〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J-2 号柄鏡形（敷石）住居址



〈事例 13〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J-1 号石垣状積石



〈事例 14〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J-1 号配石遺構



第10図 〈事例12～14〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

〈事例13〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J-1号石垣状積石（第10図中段）

J-1号石垣状積石は、傾斜面状の地形を段状に削平して平坦面を形成し構築している。J-2号柄鏡形（敷石）住居址の北側を壊している。構築初段階の石積みは規則的で、石材を横長に使用して横目地を通す。この上部にはやや乱雑な石組みがなされる。これらの石材はJ-2号柄鏡形（敷石）住居址の主体部の敷石が転用された可能性を推定している。報告書には復元資料を含む50点の土器、石器4点が掲載されている。1～7は精製深鉢形土器で、1・3は外面に幅狭の横帯文が巡り、1は縦位単沈線による区画文がみられる。内面には5条の平行沈線による横帯文と沈線間に細斜沈線が施文される。2は石垣上部から出土した。やや幅の広い横帯文が施文される。内面には3条の平行沈線による横帯文と横帯文の上部に細斜沈線が施文される。4・5は外面に4条の平行沈線による横帯文が巡り、横帯文上に細斜沈線が交互にみられる。6は小突起を有する口縁部片で、外面に横位沈線文、内面には沈線によるドーナツ状のモチーフとこの下部に三角形状のモチーフが描かれる。7は外面に横位沈線と縦位短沈潜により階段状の文様を施文する。口唇部内面は肥厚し横位沈線が巡り、上部には細斜沈線が施文される。8～10は粗製深鉢形土器で、8・9には附加条、10には沈線による格子目文が施文される。報告書の記載では、粗製深鉢形土器には若干の堀之内2式を含む可能性が指摘されている。

〈事例14〉御組長屋遺跡第Ⅱ地点 J-1号配石遺構（第10図下段）

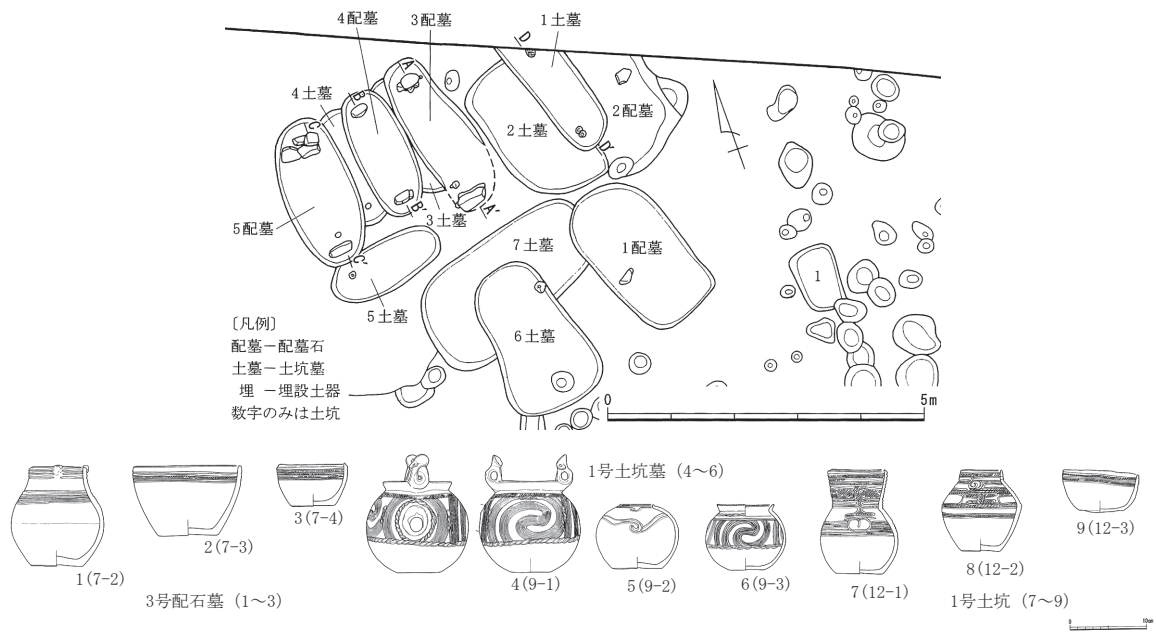
J-1号配石遺構の構築面は、J-2号柄鏡形（敷石）住居址主体部の敷石上端部との間に10cm程度の間層を挟んで構築されている。また、J-1号石垣状積石とは構築面が同一であり同時期に機能していたことが推定されている。配石は径3m程度の範囲に分布し、石囲炉状の石組みもなされるが、石材の被熱や内部にも焼土の堆積は認められなかった。出土遺物は粗製深鉢形土器が3点である。1・2は砲弾状の器形を呈する。1は口縁部から頸部を横位・斜位の調整により平滑に整形し、斜位方向に交差する沈線により格子状の文様が描かれる。2は頸部から胴部上半にかけて付加条の縄文により格子目状の文様が施文される。3は口縁部がやや内湾する器形を呈しする。太く撚りの粗い施文原体により単節縄文RLが施文される。

（山田）

〈事例15〉寺山遺跡9504地点 3号配石墓、1号土坑墓、1号土坑出土一括出土土器（第11図）

寺山遺跡は、秦野市寺山に所在し、小田急小田原線秦野駅の北北東約3kmに位置する。地形としては、ヤビツ峠付近を源流とする金目川左岸の丹沢山地から南に延びる標高170～180mの金目台地上に立地する。寺山遺跡の本地点からは、縄文時代の配石5基、土坑墓7基、土坑13基、配石群、埋設土器2基、ピットなどが発見されている。このうち該期の土器一括出土事例は、3号配石墓、1号土坑墓、1号土坑から出土している。埋設土器や土坑の一部を除き、加曾利B1式期の所産である。3号配石墓は、長軸204cm×短軸148cm、深さ65cmの南側が若干広くなる楕円形を呈し、南北両端に礫を配する。第11図1～3が一括出土したもので、1は広口壺形土器で、2、3も小型鉢形土器である。北側の礫に接して小型鉢2、3が南壁際から小型壺1が出土している。1号土坑墓は長軸222cm、短軸78cm、深さ89cmをはかる楕円を呈する。北側の調査区壁際から注口部を欠いた注口土器1点4、反対の南端から小型壺2点5、6が並んで出土した。隅丸方形を呈する1号土坑は、長軸104cm、短軸68cm、深さ60cmの規模をもつ。完形の小型壺7、8と小型鉢9、礫1点が土坑底面より10～15cm上のレベルで出土した。これらは、加曾利B1式期の埋葬施設もしくはそれに類する遺構から出土しているためいずれも小型で、ほぼ完形の状態で出土している。

（阿部）



第11図 〈事例15〉 寺山遺跡9504地点 一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

〈事例16〉 下北原遺跡（第3次調査） J 11号敷石住居址（第12図）

下北原遺跡は、伊勢原市日向字下北原に所在し、日向川左岸の丘陵上、標高110～115mの南向き斜面に占地する。縄文時代の遺構は、中期中葉～後葉および後期前葉～中葉を主体時期とするが、特に堀之内1式期から加曽利B1式期の遺構が多く検出されている。第1次～第3次調査まで行われているが、第3次調査J 11号敷石住居址、第3次調査J 2号土器集中からまとまって遺物が出土した。なお、J 11号敷石住居址およびJ 2号土器集中は隣接した位置関係にあり、J11号敷石住居址の遺物をJ 2号土器集中へ集積または投棄した可能性が指摘されている。

J 11号敷石住居址は、主体部が楕円形を呈する敷石住居址であり、主軸方向は等高線に対して直交する南東である。石囲炉から張出部にかけて敷石を配している。主体部の中央から北側を中心に多量の焼土および炭化物が観察され、中には1mを超える大形の炭化材も含まれていた。出土遺物は、報告書には土器13点、石器15点が掲載されているが、ピット内から加曽利B1式の浅鉢形土器（第12図1）、主体部焼土上層からほぼ完形の注口土器（第12図5）が出土している。第12図1の浅鉢形土器は、大形で内面にのみ施文されており、内側に屈曲する口縁部が細かい波状を呈する。口縁の屈曲部には円形刺突列がめぐり、2ヶ所の透かし孔と「の」字状文などの単位文様を起点として横位沈線が施される。第6図5の注口土器は、小形で口縁部と注口部を欠損する。上下対となる「の」字状文が交互に配され、それぞれが二条の沈線で連結される。部分的に多条沈線が加えられる。胴部の横位沈線間には斜位の短沈線が充填されている。

〈事例17〉 下北原遺跡（第3次調査） J 2号土器集中（第12図）

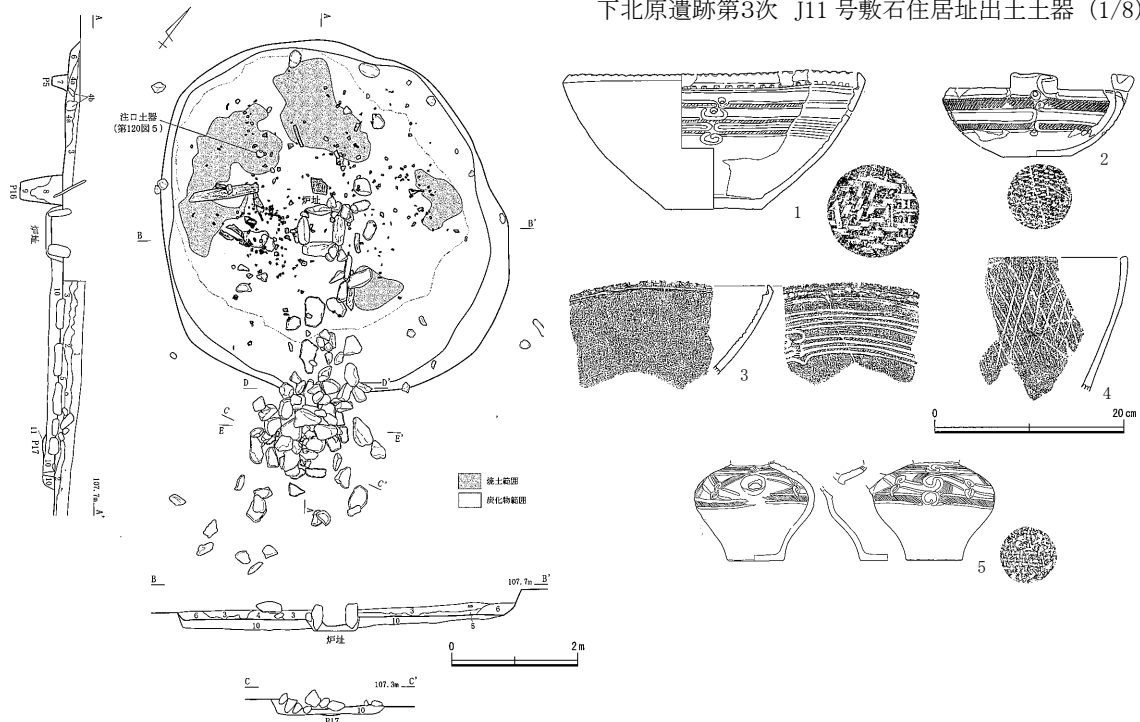
J 2号土器集中は、J11号敷石住居址の南側に隣接しており、加曽利B1式の浅鉢形土器および鉢形土器が散在する状態で検出された。復元および実測された遺物は10個体である。第12図6は内面にのみ施文される浅鉢形土器で、内側に屈曲する口縁部が細かい波状を呈する。口縁の屈曲部には楕円形刺突列がめぐり、

細かい刻目を持つ隆帯と接して横位沈線が施され、その下位には横位沈線文が密に配置される。単位文様となるS字状沈線文の端部が右へ流れ、次の単位文様とつながる。第12図7は口径が小さいが、ほぼ同じ文様構成を持つ。第12図8は小形の鉢形土器であり、多段の横位沈線が施され、最上段の沈線間には刻目が加えられる。第12図9・10はともに平縁の深鉢形土器であり、いわゆる粗製土器である。第12図9は口縁下に一条、胴部に二条の沈線がめぐり、文様帯が区画され、稲妻状の沈線文が施される。第12図10は口縁部付近に格子状の沈線文が施される。

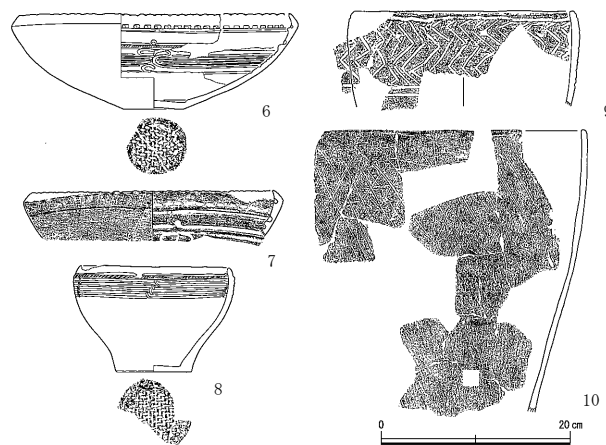
(野坂)

<事例16> 下北原遺跡第3次 J11 号敷石住居址

下北原遺跡第3次 J11 号敷石住居址出土土器 (1/8)



<事例17> 下北原遺跡第3次 J2 号土器集中出土土器 (1/8)

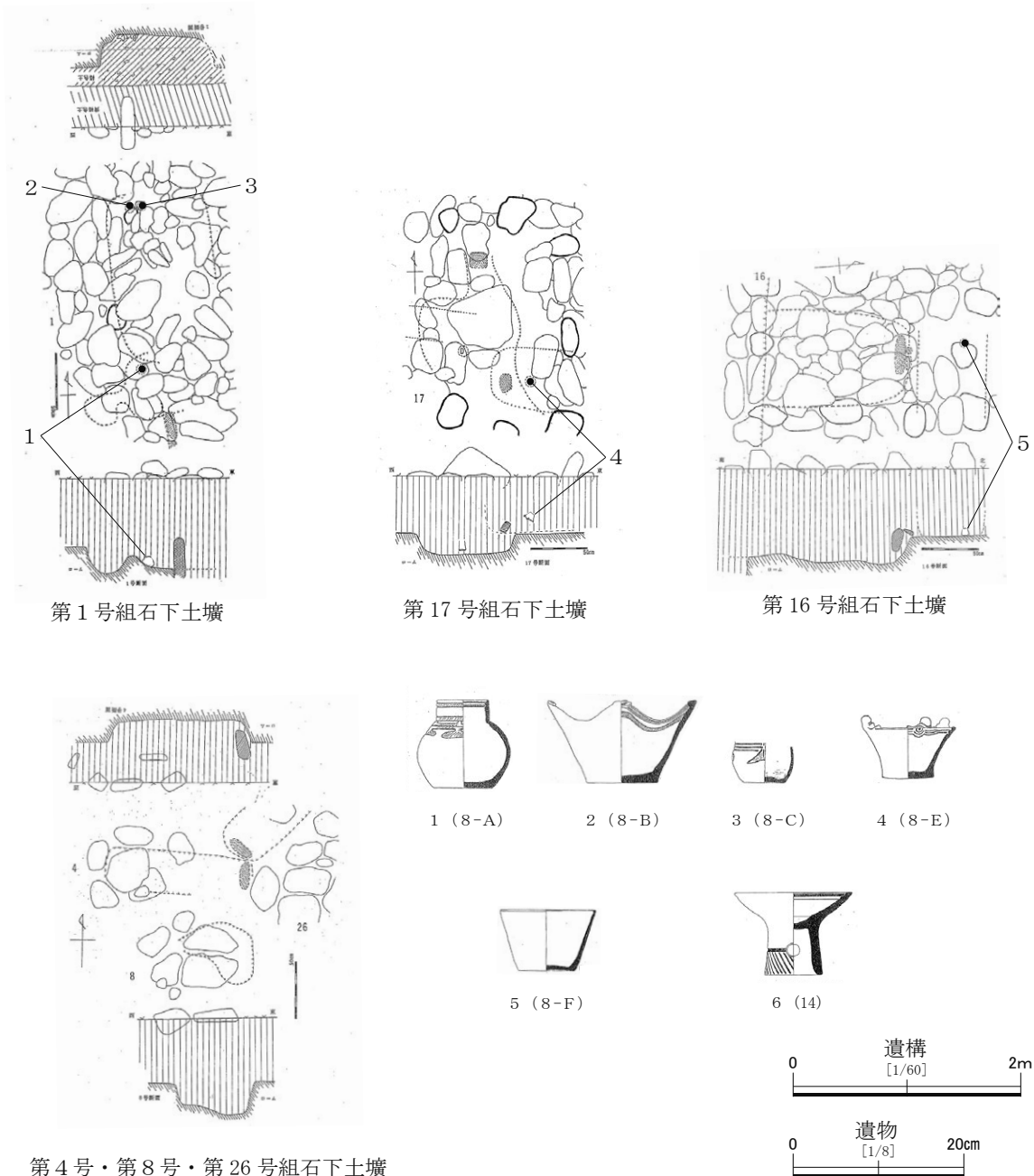


第12図 〈事例16・17〉 下北原遺跡（第3次調査） 一括出土事例（遺構1/120・遺物1/8）

〈事例18〉金子台遺跡 第1号組石、第8号組石、第16号組石、第17号組石（第13図）

金子台遺跡は足柄上郡大井町に所在する。本遺跡は酒匂川左岸の大磯丘陵北西部、標高100mに位置し、酒匂川左岸の平地との比高差は60mを測る。遺跡の南西側は松田国府津断層の急崖となり、北東側は山田断層崖となっている。1962（昭和37）年から1964（昭和39）年にかけてA・B・C・D・Eの5地区を設定し発掘調査が実施されている。

これまでの発掘調査の成果では31基の配石遺構が検出されている。報告書では検出された配石遺構を「組石」という名称で報告しており、Ⅰ型（ドーナツ型に集石）・Ⅱ型（立石を伴うもの）・Ⅲ型（自然石を集合的に集めたもの）に分類されている。該期の土器が出土した遺構としては、Ⅰ型に第1号組石、Ⅱ型に第16



第13図 〈事例18〉金子台遺跡 一括出土事例（遺構1/60・遺物1/8）

号組石・第17号組石、Ⅲ型に第8号組石があげられている。いずれの遺構も時期的には堀之内2式新段階から加曾利B1式期に構築されたものであると報告されている。

1～3は第1号組石から出土している。1は第1号組石下の土壌北西隅から、2・3は土壌北端から2点横倒しの状態で並んで出土している。1は壺形土器である。本遺構の立石に近い位置から出土しており、球形胴から直立した頸部を有する土器である。外面の口縁部と頸部にそれぞれ2本の沈線が施され、沈線間は斜行沈線で充填されている。内面の口縁部にも2本の沈線が施されている。2は鉢形土器である。口縁は4単位の大きな波状口縁を呈しており、突起部の頂点に8字状の文様が施される。外面は無文であるが、内面に6本の沈線が巡らされている。3は壺形土器である。器厚は薄く上部は欠損している。球形の胴部を呈しており、上部に3本の沈線が施文されている。下部には沈線で三角形が描かれ沈線内は縄文で充填されている。4は第17号組石下の土壌から伏せられた状態で出土した小型の鉢形土器である。口縁部の3箇所にも丸い瘤状の突起が施され、瘤状の突起の根元には沈線が巡らされている。5は第16号組石下の土壌底面から伏せられた状態で出土した小型の鉢形土器である。外面は無文で、底部は少し上げ底になっている。口縁部内面に太く浅い沈線が巡らされている。6は第8号組石の組石外縁にそって伏せられた状態で出土した台付鉢である。鉢外面は無文であるが、鉢内面口唇部に沈線が巡る。脚部には相対して2箇所に円孔が穿たれる。円孔部分には横位の沈線が巡らされ沈線下には斜行沈線が施文されている。

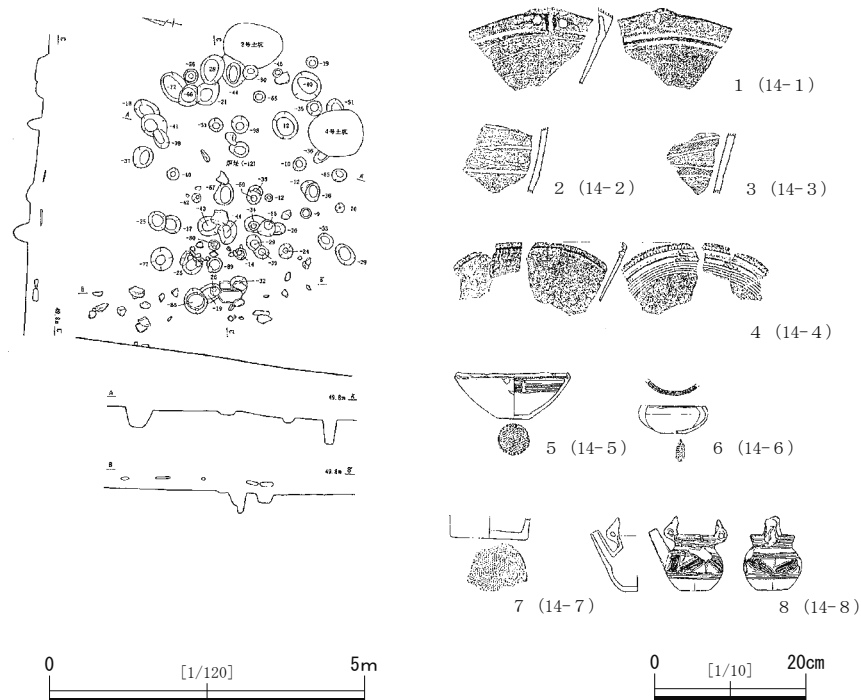
これらの出土遺物は、それぞれの組石とその下部に構築された土壌群から出土したものであるが、組石と土壌が必ずしも一致するものとは限らない。報告書では「配石下に土壌をもつ墳墓群と思われたが黒色土層中に浅く営まれたものであったため確認されたものは少なく、且つ副葬品もなく、特記に価する事項はなかったが、河原石の集合状態で発見された場合、それが墳墓であることの可能性が大きいことの一例となった。」としており、遺構の中での一括出土土器と検出状況を捉えた場合、組石と下部から検出される土壌との関係を踏まえた上で、出土遺物の一括性を判断して取り扱う必要性を指摘している。(小島)

〈事例19〉東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡 4号住居址（第14図）

東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡は、伊勢原市東大竹に所在する遺跡で、小田急伊勢原駅の南西方向約0.5kmの地点に位置する。地形的には丹沢山系の大山から南東方向へ張り出す伊勢原台地中央の伊勢原面、鈴川と渋田川に挟まれた標高約51mの舌状台地上に立地する。平成15年度に行われた発掘調査によって、縄文時代後期前葉から中葉にかけての集落が検出された。

4号住居址は調査区Bの西端部に位置し、炉址を中心に柱穴が検出された。炉址は楕円形を呈し、断面播鉢状の掘り込みを有する。住居の平面形は不明であるが、西側に大きく開くヒゲ状のピット列が確認され、張り出し部を中心に地形の傾斜に沿って水平な礫の分布が認められたこと、さらには西側の一部に大型の扁平な礫を数個敷設する状況も捉えられたことから、柄鏡形敷石住居址と推定された。敷石を構成する礫は大型の扁平礫のほかに、径10～20cm程度の礫が多く使用されている。

報告書中には1～8の土器が掲載されている。1～3・7は深鉢型土器の破片。3は磨消縄文が施されている。4～6は浅鉢・鉢形土器で、5・6の底部には網代痕が認められる。口唇部に連続的な刻目・刺突文が施され、4の内面には微細な刻目を伴う平行沈線が巡る。7は底部片。底面の網代痕は外縁が指ナデによって消されている。8は炉址の東脇から出土した小型の注口土器。前後方向に一对の把手状突起を有し、口唇部に刻目が施されている。胴部は膨らんで球状を呈し、器面には多重沈線による幾何的な文様が展開している。これら出土土器の型式は加曾利B1式期から加曾利B2式期に比定されている。(影浦)



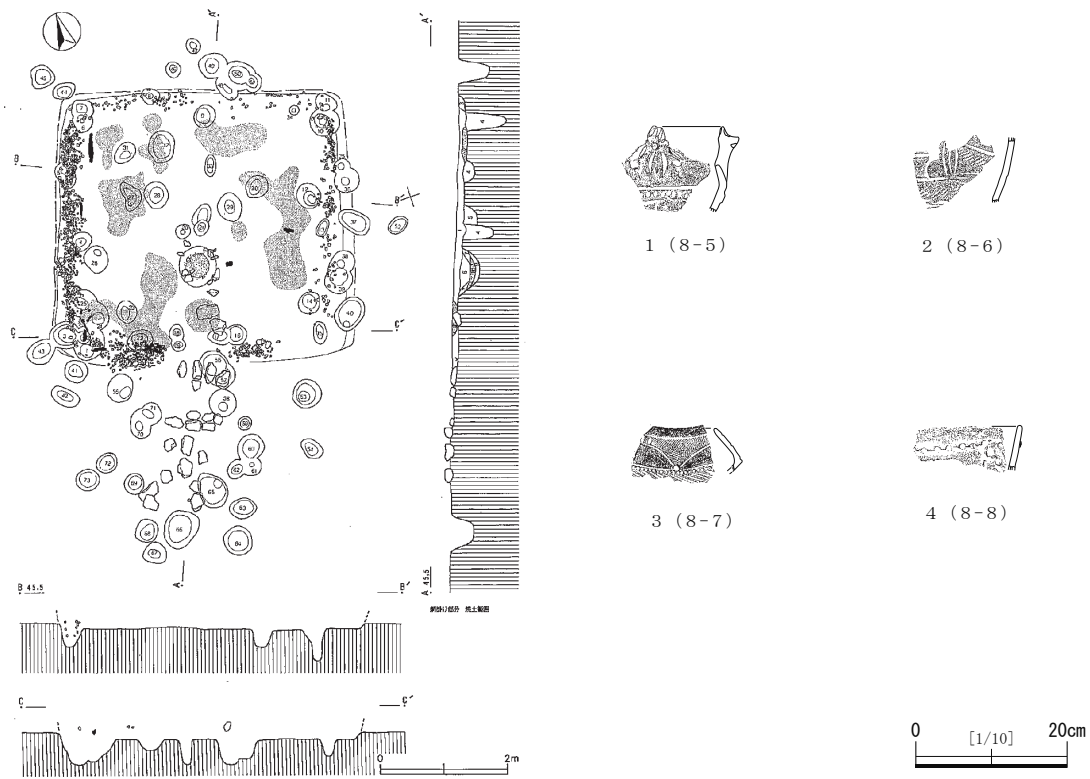
第14図 〈事例19〉 東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡 4号住居址一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

〈事例20〉 王子ノ台遺跡 20号配石（第15図）

王子ノ台遺跡は平塚市北金目1117番地他に所在し、北金目台地頂部の北東端に位置する。標高は最高で約48mを測る。遺跡は地形的な相違から西区と東区に分けられる。前者は谷戸の谷頭に相当し、南西から北東にかけて標高を下げる地形で、後者は舌状台地が張り出す地形である。1990年度に東海大学校地内遺跡調査団が本遺跡西区の発掘調査を行った結果、縄文時代中期末から後期中葉にかけて営まれた集落址が確認された。当該時期の集落を構成する遺構として、住居址や土坑、墓坑、配石遺構などが挙げられる。

20号配石は西区東側のQR-20グリッドに位置する。調査時には配石として扱われたが、住居と考えられる遺構である。主軸方位はN-21°-Eで、張出部は主体部の南側に存在する。主体部の規模は主軸長4.1m、副軸長3.9mを測り、敷石の範囲から張出部は長さ3.3m、幅1.3mと推定された。炉は主体部中央からやや出入口に寄って検出された。また、床面からは焼土や炭化材が認められ、居住停止後にある程度期間を開けてから火が放たれた可能性が考えられている。

1～4は住居床面より10～20cm上方の覆土中から出土した土器である。1は深鉢の口縁部片である。口縁部は波状を呈し、やや肥厚する。波頂部には刺突文が施され、直下に縦位の弧状沈線が施文される。頸部には2本の沈線で区画された刺突帯が認められる。2は深鉢の胴部片である。横位沈線や3本1単位の縦位沈線が施される。横位沈線間には単節縄文LRが充填される。3は浅鉢の口縁部片で、胴部が大きく張り出す。口縁部には沈線により横位および弧状に区画され、区画内に単節縄文LRが充填される。張出部には横位沈線で区画された刺突帯がみられ、その直下には条線文が斜位に施される。4は深鉢の口縁部で、口縁部に沿った紐線文が確認できる。いずれも加曽利B2式に相当すると報告される。（岩）



第15図 〈事例20〉王子ノ台遺跡 20号配石一括出土事例（遺構1/120・遺物1/10）

参考文献

- 〈事例1〉 山田仁和ほか2007『横浜市港北区篠原大原北遺跡』吾妻考古学研究所
- 〈事例2～9〉 石井 寛2008『華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41、財団法人横浜ふるさと歴史財団
- 〈事例10・11〉 長岡文紀2022『原口遺跡Ⅲ 縄文時代』かながわ考古学財団調査報告134、財団法人かながわ考古学財団
- 〈事例12～14〉 小林義典・小山裕之ほか2001『御組長屋遺跡 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点 発掘調査報告書』都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団
- 〈事例15〉 霜出俊浩・佐々木竜郎・小森明美2012『堂坂遺跡 9204地点・9308地点・9401地点・2001－04地点・2001－06地点 寺山遺跡 9504地点 寺山金目原遺跡 9608地点・9701地点・9804地点・9904地点 平沢同明遺跡 9301地点』玉川文化財研究所・秦野市教育委員会
- 〈事例16・17〉 佐々木竜郎・小森明美ほか2014『下北原遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財発掘調査報告書27、玉川文化財研究所
- 〈事例18〉 赤星直忠・神沢勇一1974『神奈川県金子台遺跡』横須賀考古学会研究調査報告3、横須賀考古学会
- 〈事例19〉 坪田弘子・佐々木竜郎2008『東大竹・下谷戸（八幡台）遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 〈事例20〉 常木晃ほか1991『東海大学校地内遺跡調査団報告2』東海大学校地内遺跡調査団